II Kings 13:1-35, 14:1-25, 15:1-35

13 章

テーマ:エリシャの最後のわざ

この部分は、聖書の中でも飾り気のない箇所です。それでも、私たちの心に語りかけることができます。この部分は、国々の支配者たちにとっては、特に良い部分です。私たちはイスラエルとユダの両方の王国を追って見ています。

北では10の部族が北王国を維持し、南ではユダとベニヤミンの部族が南王国を維持しています。南ではダビデの家系が統治しています。それは、新約聖書の中の主イエス・キリストの誕生まで続く家系です。見てきたように、ダビデの家系に嫁いだ、アハブとイゼベルの娘アタルヤによって、ダビデの家系はもう少しで抹消されてしまうところでした。

エホアハズがイスラエルを統治する

13 章では、エフーの息子エホアハズが 17 年間イスラエルを治めたことが書かれています。彼はヤロブアムの罪を犯し続けました。実際、彼の統治には特にセンセーショナルなことも興味深いことも何もありません。多くの人々は、罪が人生をエキサイティングにすると感じています。しばらくたてば、罪以上に退屈なことはほかに何もありません。お酒を飲み始めると、いつかはアルコール中毒になります。そして、その時点でほかのだれとも同じように、その人は退屈になります。そしてその人は人生の目的を失います。罪に溺れる人は、誰でも同じことです。歴史のこの期間は、とても退屈です。神さまが動いておられるときだけがエキサイティングなのです。私たちは今日、どれほど神さまを必要としていることでしょう！

(II 列王記13:1－2)「ユダの王アハズヤの子ヨアシュの第二十三年に、エフーの子エホアハズがサマリヤでイスラエルの王となり、十七年間、王であった。彼は【主】の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムの罪を犯し続けて、それをやめなかった。」

ヤロブアムは、イスラエルに子牛礼拝を確立させた人物です。彼はイスラエルを、本当の神さまを礼拝することから引き離して、罪に導きいれました。アハブとイゼベルが王座についたとき、彼らはそれよりもずっと悪い罪を犯しました。彼らは、実際に悪魔礼拝であるバアル礼拝を始めました。さて、エホアハズは自分の父エフーと同じように、バアル礼拝には関わりませんし、またアハブとイゼベルがそうだったほどに深い罪には陥りません。彼はヤロブアムが犯した罪に留まりましたが、でも、それで十分悪いのです。

エホアハズの回心

イスラエルの罪のために、神さまはアラムの王がイスラエルに敵対することを許されました。

(II 列王記13:3－4)「それで、【主】の怒りがイスラエルに向かって燃え上がり、【主】は彼らをアラムの王ハザエル、および、ハザエルの子ベン・ハダデの手にいつまでも渡しておられた。しかし、エホアハズが【主】に願ったので、【主】はこれを聞き入れられた。アラムの王のしいたげによって、イスラエルがしいたげられているのを見られたからである。」

この人エホアハズは、自分が危険と困難の中にいることを知っていました。そこで、彼は恐れて主に立ち返ります。

(II 列王記13:5)「【主】がイスラエル人にひとりの救い手を与えられたとき、イスラエルの人々はアラムの支配を脱し、以前のように、自分たちの天幕に住むようになった。」

神さまがどれほど慈悲深いかに注目してください。王が主に願った瞬間に、主は彼の祈りを聞き、それに答えられました。主は人々をアラムの圧迫から解放されました。今日の私たちは、神さまがどれほど良い方で、私たちにどれほど良くしてくださるかを実感していません。ああ、何と神さまはすばらしいことでしょう！

(II 列王記13:6－7)「それにもかかわらず、彼らはイスラエルに罪を犯させたヤロブアム家の罪を離れず、なおそれを行い続け、アシェラ像もサマリヤに立ったままであった。また、アラムの王が彼らを滅ぼして、打

穀のときのちりのようにしたので、エホアハズには騎兵五十、戦車十台、歩兵一万だけの軍隊しか残されていなかった。」
私たちは、神さまがエホアハズの人生に良くしてくださったことを見ています。王は神さまに願い、神さまは彼に答えられました。それでも王と彼の民は罪を犯し続け、偶像礼拝をし続けました。アラムの王がエホアハズの軍隊をあまりにもひどくやっつけたので、エホアハズは二度と適切に王国を守ることはできなくなりました。

（II 列王記13：8－9）「エホアハズのその他の業績、彼の行ったすべての事、およびその功績、それはイスラエルの王たちの年代記の書にしるされているではないか。エホアハズは彼の先祖たちとともに眠り、人々は彼をサマリヤに葬った。彼の子ヨアシュが代わって王となった。」
ここにエホアハズの死の記録があります。これが人間の記録です。王は死んだ、王さま万歳、というわけです。

ヨアシュがイスラエルを統治する
もうひとりの王が北王国の王座につきます。

（II 列王記13：10）「ユダの王ヨアシュの第三十七年に、エホアハズの子ヨアシュがサマリヤでイスラエルの王となり、十六年間、王であった。」
さて、頭が混乱するようなところに来ました。なぜなら、どちらの王国の王も、全く同じか、またはにたような名前を持っているからです。誰が統治しているのか、どこで統治しているのか、統治の状況はどうなっているのかを知るのはたいへんです。私には良く分かりませんが、主がそのようにしておられることには、何か特別な意味があるのだと思います。

（II 列王記13：11）「彼は【主】の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムのすべての罪から離れず、なおそれを行い続けた。」
ヤロブアムが基準でした。王が、ヤロブアムのレベルの罪に達するとき、神さまはいつでもさばかれました。

エリシャの死：彼の預言が成就する。
エリシャが病気になったのは、この時期でした。彼の死の原因は病気でした。

（II 列王記13：14）「エリシャが死の病をわずらっていたときのことである。イスラエルの王ヨアシュは、彼のところに下って行き、彼の上に泣き伏して、『わが父。わが父。イスラエルの戦車と騎兵たち』と叫んだ。」
エリヤはそうではありませんでしたが、エリシャは北王国の力のとりででした。（エリヤが天に移されたというニュースが宮殿に届いたときには、お祝いのパーティーが催されたのではないかと私は想像します。）エリシャは王にとって、とても大きな助けであったので、預言者が病気になったとき、王はとても心を痛めました。

（II 列王記13：15）「エリシャが王に、『弓と矢を取りなさい』と言ったので、彼は弓と矢をエリシャのところに持って行った。」
王がエリシャを訪ねたとき、エリシャはただ王の同情と花とを受けたのではありません。彼は今も神さまの預言者であり、神さまのメッセージを王に伝えています。

（II 列王記13：16－17）「彼はイスラエルの王に、『弓に手をかけなさい』と言ったので、彼は手をかけた。すると、エリシャは自分の手を王の手の上にのせて、『東側の窓をあけなさい』と言ったので、彼がそれをあけると、エリシャはさらに言った。『矢を射なさい。』彼が矢を射ると、エリシャは言った。『【主】の勝利の矢。アラムに対する勝利の矢。あなたはアフェクでアラムを打ち、これを絶ち滅ぼす。』」
ヨアシュは、信仰の人ではありません。これから死のうとしている預言者に対して涙してはいますが、彼は偉大な信仰の人でもないし、神さまが彼にアラムに対する勝利を与えてくださることも信じてはいません。

(II 列王記13:18－19)「ついでエリシャは、『矢を取りなさい』と言った。彼が取ると、エリシャはイスラエルの王に、『それで地面を打ちなさい』と言った。すると彼は三回打ったが、それでやめた。神の人は彼に向かい怒って言った。『あなたは、五回、六回、打つべきだった。そうすれば、あなたはアラムを打って、絶ち滅ぼしたことだろう。しかし、今は三度だけアラムを打つことになろう。』」
彼には神さまが彼を解放してくださると言う信仰がなかったので、その落胆のせいですぐにやめてしまいました。
　神さまのための多くのプロジェクトが、実を結ぶことがなく、実行されることがありません。なぜなら、神さまのこどもが反対にあったり、落胆したりするからです。人はあきらめてしまって言うのです
「このプロジェクトは神さまのみこころではないんだ。」
ヨアシュもそのような態度です。彼は矢で地面を 3 回だけしか打ちませんでした。彼はこのことによって、
「神さまは私のことを理解されることはないと思う」
と言っているのと同じなのです。今日、私はあまりにも多くの軟弱な「信仰」を目にします。人々は傍観して、希望的観測をしているだけです。彼らは言います。
「ああ、神さまのために何かしたいなあ。
」そしてその次の私が目にするのは、まだ同じところに留まっている彼らなのです。神さまはあなたあなたが神さまのために動くことを期待しておられます。神さまが自分をお使いになることができると信じるなら、さあ、立ち上がってください！エリシャはここで私たちにとても実際的なレッスンを与えてくれます。

エリシャの墓の奇蹟
(II 列王記13:20－21)「こうして、エリシャは死んで葬られた。モアブの略奪隊は、年が改まるたびにこの国に侵入していた。人々が、ひとりの人を葬ろうとしていたちょうどその時、略奪隊を見たので、その人をエリシャの墓に投げ入れて去って行った。その人がエリシャの骨に触れるや、その人は生き返り、自分の足で立ち上がった。」
死んでからさえも、エリシャは奇蹟を行いました。彼は国にとって、なんと偉大な力のとりでだったことでしょう。

(II 列王記13:22－23)「アラムの王ハザエルは、エホアハズの生きている間中、イスラエル人をしいたげたが、【主】は、アブラハム、イサク、ヤコブとの契約のために、彼らを恵み、あわれみ、顧みて、彼らを滅ぼし尽くすことは望まず、今日まで彼らから御顔をそむけられなかった。」
神さまはハザエルの働きによってイスラエルを罰してはおられますが、その圧迫が行き過ぎることは許されません。

(II 列王記13:24－25)「アラムの王ハザエルは死に、その子ベン・ハダデが代わって王となった。エホアハズの子ヨアシュは、その父エホアハズの手からハザエルが戦い取った町々を、ハザエルの子ベン・ハダデの手から取り返した。すなわち、ヨアシュは三度彼を打ち破って、イスラエルの町々を取り返した。」
言い換えれば、彼の信仰のとおりのことが彼に起こりました。神さまは彼に”3 回だけ“勝利を与えられました。

14－16 章

テーマ:イスラエルとユダの良い王と悪い王。

アマツヤのユダ統治
さて、アマツヤがユダを統治するところにやって来ました。前にも言いましたが、アマツヤは良い王でした。彼は 29 年間統治しました。

(II 列王記14:1)「イスラエルの王エホアハズの子ヨアシュの第二年に、ユダの王ヨアシュの子アマツヤが王となった。」

同じ名前の王がふたりいるというのは、確かに頭が混乱します。年表を見れば、その混乱をはっきりさせる助けになります。

（II 列王記14：2）「彼は二十五歳で王となり、エルサレムで二十九年間、王であった。彼の母の名はエホアダンといい、エルサレムの出であった。」
アマツヤの母は、エホアダンでした。これらの王たちの母親たちは、もし自分たちの息子が良い王なら賞賛され、悪い王なら責任を問われます。アマツヤは良い王でしたから、彼の母はすばらしい人だったことでしょう。

（II 列王記14：3）「彼は【主】の目にかなうことを行ったが、彼の父祖、ダビデのようではなく、すべて父ヨアシュが行ったとおりを行った。」
ヨアシュの息子アマツヤがユダの王位を継ぎ、彼は主の目にかなうことを行いましたが、ダビデの基準には達することができなかったと書かれています。
　同時に、特にこの時期の間、ふたつの王国間での内戦が続いたことが分かります。

（II 列王記14：19－22）「エルサレムで人々が彼に対して謀反を企てたとき、彼はラキシュに逃げた。しかし、彼らはラキシュまで追いかけて、そこで彼を殺した。彼らは彼を馬にのせて行った。彼はエルサレムで先祖たちとともにダビデの町に、葬られた。ユダの民はみな、当時十六歳であったアザルヤを立てて、その父アマツヤの代わりに王とした。彼は、アマツヤが先祖たちとともに眠って後、エラテを再建し、それをユダに復帰させた。」
アマツヤはラキシュの町に逃げました。そこには陰謀者につかまることを避けるために避難所を与えてくれるとりでがありました。

ヤロブアム II 世がイスラエルを統治する
（II 列王記14：23－25）「ユダの王ヨアシュの子アマツヤの第十五年に、イスラエルの王ヨアシュの子ヤロブアムが王となり、サマリヤで四十一年間、王であった。彼は【主】の目の前に悪を行い、イスラエルに罪を犯させたネバテの子ヤロブアムのすべての罪をやめなかった。彼は、レボ・ハマテからアラバの海までイスラエルの領土を回復した。それは、イスラエルの神、【主】が、そのしもべ、ガテ・ヘフェルの出の預言者アミタイの子ヨナを通して仰せられたことばのとおりであった。」
ヤロブアムは主の目の前に悪を行いました。それでも彼は、預言者アミタイの子ヨナによれば、イスラエルの国境を回復しました。これは、ヨナ書を書いたヨナに関する、歴史的な言及です。この言及によって、与那覇実在の人物でイスラエルの預言者であったことが確認されます。ついにヤロブアム II 世は死に、ザカリヤが王位につきました。私たちは、この国の終わりに向かっています。

アザルヤ（ウジヤ）がユダを統治する
（II 列王記15：1－4）「イスラエルの王ヤロブアムの第二十七年に、ユダの王アマツヤの子アザルヤが王となった。彼は十六歳で王となり、エルサレムで五十二年間、王であった。彼の母の名はエコルヤといい、エルサレムの出であった。彼はすべて父アマツヤが行ったとおりに、【主】の目にかなうことを行った。ただし、高き所は取り除かなかった。民はなおも、その高き所でいけにえをささげたり、香をたいたりしていた。」
多くの意味でアザルヤ（ウジヤ）は良い王でした。でも、彼はするべきではなかったことをしました。彼は祭司職に出しゃばったのです。この故に、彼はツァラアトによって打たれました。（II 歴代誌26：15－21参照）

（II 歴代誌26：15－21）「さらに、彼はエルサレムで、巧みに考案された兵器を作り、矢や大石を打ち出すために、やぐらの上や、城壁のかどにある塔の上にこれを据えた。こうして、彼の名は遠くにまで鳴り響いた。彼がすばらしいしかたで、助けを得て強くなったからである。しかし、彼が強くなると、彼の心は高ぶり、ついに身に滅びを招いた。彼は彼の神、【主】に対して不信の罪を犯した。彼は香の壇の上で香をたこうとして【主】の神殿に入った。すると彼のあとから、祭司アザルヤが、【主】に仕える八十人の有力な祭司たちとともに入って来た。彼らはウジヤ王の前に立ちふさがって、彼に言った。『ウジヤよ。【主】に香をたくのはあな

たのすることではありません。香をたくのは、聖別された祭司たち、アロンの子らのすることです。聖所から出てください。あなたは不信の罪を犯したのです。あなたには神である【主】の誉れは与えられません。』ウジヤは激しく怒って、手に香炉を取って香をたこうとした。彼が祭司たちに対して激しい怒りをいだいたとき、その祭司たちの前、【主】の神殿の中、香の壇のかたわらで、突然、彼の額にツァラアトが現れた。祭司のかしらアザルヤと祭司たち全員が彼のほうを見ると、なんと、彼の額はツァラアトに冒されていた。そこで彼らは急いで彼をそこから連れ出した。彼も自分から急いで出て行った。【主】が彼を打たれたからである。ウジヤ王は死ぬ日までツァラアトに冒され、ツァラアトに冒された者として隔ての家に住んだ。彼は【主】の宮から絶たれたからである。その子ヨタムが王宮を管理し、この国の人々をさばいていた。」

彼が死んだとき、イザヤは心を痛めました。なぜなら、イザヤはアザルヤの後継者が国を再び偶像礼拝に導くのではないかと恐れていたからです。イザヤの恐れは正当でした。なぜなら、彼の孫息子は国を偶像礼拝に導いたからです。ウジヤの統治に関しては、歴代誌とイザヤ書に達したときにもっと多くのときを割きます。

エフーの家系の最後のザカリヤは、6ヶ月だけ統治したあと、シャルムによって殺されました。シャルムもたいしたことはありませんでした。彼は1ヶ月だけ統治し、メナヘムに権力の座から引き下ろされて殺されました。メナヘムは10年統治し、ヤロブアムと同じ悪を行いました。

この時点でアッシリヤの王プルがイスラエルに敵対して出てきました。メナヘムは自分の王国を保つために1000タラントの銀を支払いました。国にとって暗黒の時代でした。彼の死に際して、彼の息子ペカフヤが王位を継ぎましたが、自分の侍従ペカが陰謀を企て彼を殺すまで、2年間だけ統治しました。

ペカの統治の間に、アッシリヤの王ティグラテ・ピレセルがイスラエルに敵対してやって来て、ナフタリ族を捕まえました。ペカはホセアによって殺されました。ヨタムがユダを統治し、彼は良い王とされています。

ヨタムがユダを統治する

さて、ユダの王たちとアザルヤ（ウジヤ）の息子に戻ります。

（II 列王記15：33）「彼は二十五歳で王となり、エルサレムで十六年間、王であった。彼の母の名はエルシャといい、ツァドクの娘であった。」

彼は良い王とされ、主は彼の母の名前を記しておられます。

（II 列王記15：34－35）「彼は、すべて父ウジヤが行ったとおり、【主】の目にかなうことを行った。ただし、高き所は取り除かなかった。民はなおも高き所でいけにえをささげたり、香をたいたりしていた。彼は【主】の宮の上の門を建てた。」

彼は同時に、ついには彼の民を捕囚に送ることになる偶像礼拝に目をつぶっていました。